

ちいきで共に働き暮らすために

「はたらっく・ざま、ゆがわら、ひらつか」の3か所の「はたらっく」は、生活クラブ生協協同組合と共同で受託しています。ここでも働くことに自信がない方達に、働くための準備に向けた支援をしています。

「はたらっく・ざま」は座間市から3年間（2022年度～2024年度）の生活困窮者自立支援制度の就労準備支援事業を受託しました。これまでの受託年数を合わせると8年間となります。

<これまでの5年間(2017年～2021年度)の委託から見たこと>

○この事業を利用する方たちは、経済的な困窮以外に孤立している、ひきこもり気味の20代30代が中心であり、家族同居が大半。社会経験が不足しているので、体験型のプログラムで自信を高める方法が適していた。また、基本プログラム以外に参加できるお楽しみプログラムなどを企画、ものづくりや季節行事など生活文化に触れてもらった。

○利用者が限られた期間で苦手なことの克服、課題解決に至るのは容易ではなく、当事者の力に頼らざるを得ない。すべての課題を解決して社会に出たケースは少なく、課題を抱えながら就労に向かう人たちもいる。

○就労してから1年間の定着支援はかなり有効である。会って様子を聞き、悩みや相談に耳を傾けることで、そのまま働き続けている。止む無く辞めた利用者には次の働き先を一緒に探したり、短時間ワークからフルワークへの転職をサポートしたり、95%の人が働き続けている。

○利用者は5年間で70人、就労者は30人、協力事業所は生活クラブ関係を除いた31団体、困った時に相談連携できるネットワークは座間市社協、JAさがみ、座間市内の地域事業所、ハローワーク、座間市、海老名市の社会福祉法人などへ広がった。

<今後の事業展開におけるポイント>

○コロナ禍による影響から

就労までに時間がかかる利用者には、コロナ禍でかなり不利な状況になった。容易に仕事先が決まらない。景気の変動にもよるが、「はたらっく」の利用者の出口が決して多くはない。

引きこもり傾向のある利用者が、ますます社会とのつながりが薄くなりがちで、出る機会や場所の確保をどうするか。

○利用者の困難が複合化

ひきこもり期間が長い人、外国籍の人（年代は高め）、今年度からこの就労準備支援事業の利用者が生活保護受給者も対象となることから、50代以降でかつ就労経験もあり自立している方の利用が増えそう。人生経験が豊かな人たちなのでこれまでの経験不足の若者とは異なるため接し方、対応には注意が必要。

さらに、障がい者手帳がある人、もっていないがメンタル面が不安定で自立には時間がかかりそうな人が昨年から増えてきている。この傾向は今後も続きそうである。専門職との連携を進める。

<2022年度の活動について>

○協力事業所開拓

出口としての実習先から就労先の開拓は重要。また、座間市支援調整会議への参加メンバーにも働きかけを進め、ネットワークを拡大する。

○社会参加プログラムの開拓

実習以外の社会参加としての場を提供可能な事業所の開拓を行う。ボランティア活動に近い内容になるが働く手前の社会への一歩として有効と思われる。社会福祉法人から協同組合、NPO団体など、理念が共有できる団体から先に働きかけていく。

○利用者が様々な課題を抱えていることから、個別支援が重要になってくる。これまで準備していた基本プログラムを変則的に実施していくケースも出てくることから、スタッフが柔軟に対応できるようにスキルアップに努める。個別対応では特に利用者に関心をもつことを的確に把握しプログラムづくりを進めるスキルが必要。

○昨年に同じビル内でオープンした「みんなの居場所ここから」と連携し、自分の殻を破るきっかけをつくる居場所と働く準備のために決まった場所、時間に通い、社会ルールを身につける「はたらっく・ざま」の2つの事業で利用者が安心して通える場づくりを進める。

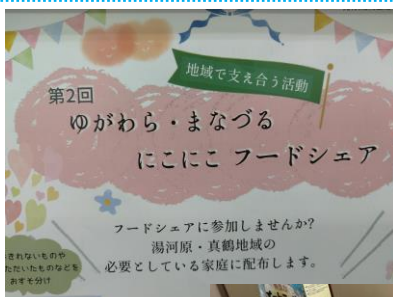
以上、「はたらっく・ざま」は、今年も利用者ニーズに応え、当事者の気持ちに寄り添いながら、支援内容の充実を図ります。

「はたらっく・ざま」代表 おかだゆりこ



↑クリスマス会のポスター作りです

「はたらっく・ゆがわら」2022年度に向けて2019年の夏に小田原保健福祉事務所から足柄下郡の就労準備支援事業を受託して、今年は早3年を迎えます。想定外のコロナ禍などで、思い通りにプログラムをすすめられなかった面もありますが、事業所は休まず開き、利用者も途切れる事はありませんでした。



フードシェアの様子



この間、少しずつ地域での認知が広がり就労準備支援事業の利用者が増えましたが、「はたらっく・ゆがわら」の地域性か、メンタルの課題が重い利用者が多いというのが現状です。統合失調症などの精神障害がある方や発達障害の方は、暮らしのプログラムを終了しても、実習や社会参加プログラムにすすむことが難しく、利用者一人一人にあわせた対応をしています。基本8回の継続実習が難しい方々に向けて、単発実習や事業所見学などの場面を増やしていきます。今後も今まで以上に、利用者への個別支援内容の充実につとめ、時間をかけた丁寧な支援をこころがけます。

また、湯河原、真鶴は生活クラブ運動グループもなく、地域活動を行うNPO法人なども少ない地域です。協力事業所はなかなか増えていないので今年は地域の事業所等を訪問して、生活困窮者問題や「はたらっく・ゆがわら」の事業を知らせていく活動を地道にすすめていきたいと考えています。

居宅の支援もコンスタントに依頼があります。高齢者の引っ越しや、無料低額宿泊所からアパートへの転居など様々の事例がありますが、自分でアパートを探すことが難しかったり、引っ越しの買い物、諸手続きも進められない方たちへの支援を行っています。また、湯河原町に越してきても、なかなか出ていける場所のない方には定着支援を行います。

今年度から新たに、生活困窮者世帯等の子どもの学習支援・居場所事業を受託しました。昨年10月から自主活動として生活困窮者家庭の子どもたちに向けた学習支援の準備を整えていたので、受託決定後、比較的スムーズに4月から学習支援教室を開始できました。ここでは、子どもたちが自由にのびのびと勉強やおしゃべりを楽しんでいます。一人ひとりの個性を尊重しながら、まずは通ってもらうことを第一に考えています。居場所イベントは年に6回開催します。



■協会の活動

季節行事をとりいれながら、みんなで一緒に何かを作ったり、ゲームなどで楽しむ場面をつくります。ボランティアの大学生や地域の大人とのふれあいも貴重な経験になると考えています。事業外の自主活動として、年に2回、利用者以外の組合員や地域の人たちも誘って自主の居場所も行います。第1回は8月に映画界を実施します。

地域の組合員のアソシエーションである「おたすけ隊」とは事務局として、ともに活動しています。年間4回「ゆがわら・まなづるにこにこ・フードシェア」を開催して町の人たちや事業者などにも協力を仰ぎながら、「はたらっく・ゆがわら」の事業とあわせて、生活困窮者の課題への理解を深めていければと思います。

2022年も共同企業体としての総合力を発揮して、必要な人たちにとって少しでも力になれるようスタッフ一同、地域づくりの視点を忘れずに事業を行っていきます。「はたらっく・ゆがわら」代表 柏木晶子



ゆがわら学習支援居場所ですら焼きづくりをしました。

2022年度 「はたらっく・ひらつか」の活動

「はたらっく・ひらつか」は、昨年5月から利用者の受け入れを開始、1年が過ぎました。1年間で20人が申し込み、19人が継続利用、2人が市内の福祉施設に清掃業務で就労しました。年代的には、50代以降の利用者が半数を超え、就労経験がある方たちが多いです。利用者は困窮者と言われる方より生活保護受給者が多く、男性も6割を占めます。

「はたらっく・ひらつか」のプログラムも、「ざま」「ゆがわら」と同様に生活スキルを高める基本プログラムを中心に事業者交流会、見学、実習、就労準備講座、就活へと続く内容にしましたが、就労経験があり年齢も高い利用者の生活スキルを高めるプログラムは、学んでスキルアップするというより、利用者の生活の様子や課題を引き出すこ

とを目的にしました。人生経験が豊富な利用者ですのでその生き方を尊重し認めることから始まります。利用者には様々な過去があります。「はたらっく・ひらつか」の事業を利用するきっかけもそれぞれです。私たちが考える「支援」と当事者が願う「支援」とは異なる場合もあることを念頭に、ご本人の意志を確認しながら、ひとつひとつゆっくりとプログラム内容を決めています。

2年目を迎えた「はたらっく・ひらつか」は、2人の就労者の定着支援を行い、利用者の相談や困りごとに寄り添いながら働き続けられるように支援をします。同時に実習中の方、これから実習に入る方において、多種多様な協力事業所を開拓することが第1課題となります。ワーカーズ・コレクティブや生活クラブ生協関係団体への連携関係を構築することはもちろん、平塚市内の事業所開拓が必要になっています。市内の社会福祉法人、NPO 団体に積極的に訪問し、「はたらっく・ひらつか」の理解と共感者を増やしていきます。

初年度から開始している「お楽しみサロン」は湘南生活クラブ理事会や、組合員と市民によるサポーターの協力のもとで実施しています。生活の楽しみ方を良く知っている皆さんですので、毎回充実した内容となり利用者も満足して帰ります。このサロンは隔月開催で、参加の機会が限られていることから、今年から、新たに「居場所のんびり」を企画、開催します。この居場所は、利用者の誰でも参加でき、気兼ねなく集えるよう、何もしない、好きなことを自由に行う場です。この運営はサポーターにお願いしています。初回は5月に実施、4人が参加しました。サポーターがその場で焼いたクッキーを口にしながらおしゃべりする、サポーターと利用者の交流は素敵な風景です。通える場所がある、待ってくれる人がいる、知り合いがいることで、人はみな安心して穏やかな気持ちになれることを教えてくれました。

「はたらっく・ひらつか」は、1年で就労者が出るまでに至りましたが、順調に事が進む人は稀有であることを当たり前と受け止め、おひとりおひとりが自信をもって社会参加できるように丁寧な支援を心がけます。

前事業責任者 おかだゆりこ